

# 墨離軍と遼の対西域関係

岡崎 精 郎

【要約】 かつて和田清博士は、明代中葉に活躍した北虜の別種セ克力の問題を取扱われた際、唐代、河西節度使管下にあつた墨離軍の墨離を以てその前身と解せられることによつて、それが既に少くとも唐初より相当に認められた部族なることを指摘され、爾後殆んど千年に近い間、同部族が天山東北端の山地を保持して栄えたことを説かれて、その強靱性と同地方自然の特殊性とに言及せられた。

ここで問題となるのは、天宝年間の記事を最后として中国側史料より姿を没した墨離軍が、約二世紀をへだてて、遼の太宗の天顯三年(九二八)に至り、遼軍中の一部隊として出現する事実であり、これは太祖の西征(天贊三年・九二四)と関連づけて考うべきものであるが、その後、会同三年(九四〇)に、「墨離の鶴末里」の西ウィグル遣使の伝えられるのは、遼と西ウィグルの交渉を考へる場合、看過しえない。恰もこのころ、後晋より于闐との親善工作が試みられて、于闐への使節は途次、河西諸地域にたいして招撫工作を行つたのであるが、中国側の触手のかくして西方へ伸び行くのに対して、遼側の対西域工作として具体化したのが鶴末里遣使事件ではなかつたか。しかも墨離はこの事件を最后として遼側の史料に姿をみせなくなるのであるが、それはそれ自体として問題を投ずるものと考えられるのである。

—

かつて和田清博士は、明の中葉——成化・弘治のころ——に現われ、甘肅辺外から哈密の北辺にかけた地域に互つ

て活躍した北虜の別種セ克力(meh-ko-li)——もしくは野セ克力——の問題をとり上げられた際、それが既に少くとも唐初から相当に認められた部族にして、爾後殆んど千年に近い間、突厥・ウィグル・遼・金・元代々の変遷をよそ

に見つつ、依然として天山東北端の山地を保持して繁栄したことを説かれ、この部族の強靱性とともにもその地方自然の形勢の特殊なる天恵を指摘せられた。<sup>①</sup>

その際、博士は、唐代墨離軍の墨離 (mo-li)、遼代の龜古里 (kuan-ko) を以て夫々モ克力の前身なりと解釈せられたのであるが、墨離・墨離軍はこれらの字面を以て遼代史料にも現われるのであつて、小篇においてはこれら史料に基きつつ、遼代の墨離乃至墨離軍の問題をとり上げんとするものである。すなわち、遼と西域、とくに西ウイグル——以後、安部健夫教授が近著「西ウイグル国史の研究」において、天山時代のウイグルを指して用いられたこの用語を採る。——との交渉を取扱うに当つて、そのルートの上に位置するものとしての墨離の役割を考え、よつて以て、遼代における対西域関係の一端を究明せんとするものにも他ならない。一体、遼国内部における文化的・経済的担当者としてのウイグルの役割とその重要性は、契丹小字製作がウイグル文字に基いたとの所伝 (遼史卷六四皇子表) をめぐる問題、さらには、遼の国都上京における「回紇宮」——ウイグル商人の居留地区——の存在 (遼史卷三七地理志) に

もしめされる如き商業貿易の問題などにも顯著に窺われるところで、これらはすでに指摘をへたところであるが、以上諸問題の基礎に横わる事実として、遼とウイグルの国際・政治關係が綿密に検討されねばならず、迂余曲折を重ねる両者の關係の中に、遼の西域進出にたいする積極的な意圖をみいだすべきである。ウイグルといえば、甘州ウイグルの問題も当然含まれてくるが、いまは焦点を西ウイグルに集申し、甘州の問題はこれを別の機会にゆずる。<sup>②</sup> けれど、遼の対西域關係、わけても対西ウイグル關係こそは、東西交通の面よりしても、さらにはのちの西遼建國の問題へ連るものとしても再検討を要するものと考えられるのであつて、いま墨離軍乃至墨離の問題を手がかりとしてここに考察を加えてみたい。

以下、論旨を進めるに當つて、まず、唐代における墨離軍の实体を的確に把握することによつて、後世遼代における墨離の實際を探るよすがとなし、次いで、唐代墨離軍との相違点に考慮を払いつつ、遼代の墨離軍の問題を攷え、当代における墨離部族の役割を究明したいと思ふ。

二

墨離軍は唐代西北边防軍機構の一環として初見する。すなわち、元和郡県図志卷四〇・隴右道下、涼州条に河西節度使管下の諸軍を列記した中に、

墨離軍。(以下割注) 瓜州西北一千里。管兵五千人馬四百匹。東去理所一千四百余里。

とみえて、その位置・内容をしるし、瓜州との距離・方角については旧唐書卷八三地理志・資治通鑑(卷二二五)天宝元年春正月壬子条の胡三省注にも同一記事が徴せられる。

ところで、涼州在の河西節度使の設置年代は岩佐精一郎氏の考証によつて、景雲元年(七一〇)なることが説かれているが、墨離軍の設置年代は唐会要卷七八河西節度使条に、

墨離軍。本是月支旧国。武徳初。置軍焉。

とあつて、その年次は河西節度使のそれよりも遙かに溯るとされ、この記事は浜口重国博士も指摘された如く、墨離軍の設置年代を明記した唯一のものであるが、ここに記された年次は俄に信じ難い。すなわち、浜口博士も指摘

されている如く、墨離軍並びにこれとともに武徳中に設置を伝えられる玉門軍(通典卷一七二)を除き、他のおよそ四十軍はすべて高宗儀鳳年間(六七六一八)以後の設置にかかるのであつて、まず、この年代の距りに疑問が抱かれる。しかも、玉門軍についてはさきの武徳説の他、唐会要(卷七八)・元和郡県図志(卷四〇)・新唐書(卷四〇)には夫々開元中もしくは開元六年にかけてその設置をしるしており、ひとり墨離軍の設置年次がきわめて早く記されるのは当然疑問視されるところである。

ここで墨離軍の設置年代に関連して、墨離軍と沙陀の關係をしるした次の三記事が注目される。すなわち、

(A) 始祖拔野。唐貞観中(六二七—六四九)。為墨離軍使。

從太宗討高麗・薛延陀有力。為金方道副都護。因家于

瓜州。(旧五代史卷二五武皇紀上)

(B) 龍朔初(六六一)。以廼月箇沙陀金山。從武衛將軍薛

仁貴討鉄勒。授墨離軍討擊使。(新唐書卷二一八沙陀伝)

(C) 唐則天通天中(六九六—七)。有黑(墨)鶻。離軍討擊

使沙陀金山。為金滿州都督(冊府元龜卷九五外臣部種族条)

右の中、(A)の記事は沙陀朱耶氏の系譜をのべた中のものであり、岩佐精一郎氏は五代史記の記事(巻四、贊)を引いてこの記事を妄誕な始祖伝説とされたが、五代史記の右の記載は抜野と抜野古——九姓鉄勒(Toquz Oruz)の——とを混同したものであり、むしろ歴史的存在とみなさるべき抜野を以て氏族の始祖とみなすべからざること筆者のさきに指摘したところである。さて、(A)の記事によれば、墨離軍の存在は貞觀中に溯らしめられ、前引唐会要の武徳初説に近接するが、果して如何であらうか。さきに和田博士は(B)の記事によられつつ、西突厥の別部処月の種といわれる沙陀の住地は、ロブ・ノール東方の北庭の磧に當るが、それは、「瓜州の西北一千里」と注せられる墨離軍の地と略合致することよりして、その酋長沙陀金山が墨離軍討撃使に任ぜられたのは自然のこととせられた。これにたいして、岩佐氏は(A)・(B)・(C)の三記事並びに前引唐会要の武徳初設置記事に批判をこころみ、高宗永徽二年(六五二)、西突厥の叛に処月が応じ、唐に攻撃せられて処月の地は金滿・沙陀の二羈縻州たらしめられる迄(新唐書沙陀伝)、処月の地に唐兵が鎮して墨離軍の存したことは到底考えられずと

して(A)の貞觀中説並びに唐会要の武徳初説を排し、(C)の通天中に沙陀金山が墨離軍討撃使たりしとの記事を推されたのであるが、さらに龍朔初にも討撃使たりしことを伝えた(B)の記事については、軍使が四年一替で、殊に討撃使は臨時的な職制なるが故に、龍朔初より三十六年以上もその職にあつた筈はなく、従つて墨離軍が龍朔年間にあつたとの説は信ぜられずとされた。尤も、永徽四年(六五三)、処月の地が羈縻州となりてよりのち、龍朔初にも沙陀出身者と墨離軍との關係の可能性なしとしないが、沙陀金山一個人が三十余年の距りを以て再度まで討撃使に任ぜられているのは不合理である上に、墨離・玉門以外のおよそ四十軍が前述の如く高宗儀鳳年間(六七六—八)なることよりして、墨離軍の出現も(C)の通天中の辺に擬するのが妥当と考えられる。

墨離軍の發生はもとより部族名としての墨離より来たことと論をまたない。ところで墨離そのものの系統は如何であらうか。これに関し、和田博士が、「少くとも唐代の墨離は突厥種の別種であつたやう」であると推測を下されているのは、当時における同方面の情勢から推して恐らく妥当

と考えられるが、但し、この場合、前述の如き沙陀出身者が墨離軍討撃使たりしことが直に墨離と西突厥の別部たる沙陀を内容的に同一視することを可能ならしめるかは疑問であり、後述する如く、中唐以後、沙陀東遷のちも、墨離が依然として故地にありし事実よりしても、両者を混同視することは出来ない。しかも、沙陀そのものについては、それが、「単一なる部落でなく、沙陀種の近くに流移して、処月部の傍にいた雑種の総名として与えられた名称に由来」するのではないかとの推定も小野川秀美氏によって試みられており、沙陀の部族構成を攷うべき直接の史料たる「沙陀三部落」も、その内容分析についてはエーベルハルト氏の解釈にもなお問題が残されているのである。<sup>⑩</sup>ともあれ、墨離なる称呼は当代チュルク史料にもみ出されず、その部族内容はこれを明らかにしえないけれど、おそらくは、チュルク系たることは一応疑ないにせよ、むしろ別派的存在——中国史料にいわゆる「別種」、または「別部」というが如き筋合のもの——と考えられる。なお、墨離軍の場合、その基幹とするところはもとより墨離とみられるが、なおその他にその構成要素が混成的内容のものた

りしことは、前述の如く、その指揮者に沙陀出身者が任ぜられ、また後述の如く、漢人出身者もあてられていたことによつても推測しえられるのであつて、この場合、やはり同じく河西節度使管下の豆盧軍の豆盧が鮮卑語にて「帰義」——すなわち中国への降伏・帰順——を意味し<sup>⑪</sup>、その内容はおそらく帰化胡族を以て混成されたらしき事実<sup>⑫</sup>も併せ考えらるべきであらう。

しかも墨離軍については、冊府元龜卷九八外臣部征討五並びに資治通鑑（卷二二三）に、開元十七年（七二九）、張守珪が瓜州刺史墨離軍使として吐蕃を撃破せしことを伝えている。この記事は藤枝晃氏によつて、瓜州刺史の墨離軍使兼任の例として挙げられたところで、<sup>⑬</sup>時あたかも河西節度使が設置されて西北边防が一段と整備段階に入つた際の事例としても注目されるが、おそらくこれは、沙陀が先天初（七二二）に、「吐蕃を避けて部を北廷に徙した」（新唐書沙陀伝）ことと関連するものであらう。すでにこの時、墨離軍使の官は漢人に与えられているのであつて、沙陀そのものとの関連は殆んど考えられない。さらに、資治通鑑（卷二一五）、天宝五載条に王忠嗣の戦功を列挙した中に、

(王忠嗣) 又討吐谷渾於墨離軍。虜其全部而還。

とあり、兩唐書王忠嗣伝(旧唐書卷一〇三・新唐書卷一三三)にも対応記事がある。これによれば、墨離軍は一時的とはいえ、吐谷渾の一拠点と化していたのであり、ここに至つて、墨離軍と沙陀の關係は全く考えられない。この後、沙陀は貞元六年(七九〇)、ウイグルと吐蕃の間に戦われた北庭の役を契機として吐蕃に服属し、その後、吐蕃のために部族七千帳は悉く甘州に徙され、さらに元和三年(八〇八)に至つてついに東遷のやむなきに至り、山西方面へ移動したのである。この間の経緯については田坂興道氏の詳述されたところに譲つて今はふれない。もとよりこの間、甘州には、後晋のころまで存在を伝えられた「鹿角山沙陀」の如き、東方移動に洩れた遺衆も認められるけれども、墨離軍の所在方面において、沙陀との關係はこの後にはもはや考え難いのではあるまいか。このことは、次に遼代の墨離軍・墨離の問題を考えるに當つて、まず念頭におかれねばならない。

さて、前引通鑑の天寶五載条の記事に加えて、敦煌莫高窟第二十窟の供養人像の題名に、

朝議大夫使持節都督晉昌郡諸軍事守晉昌郡太守兼墨離軍使賜紫金魚袋上柱國樂庭瓌供養時

とみえるのが指摘せられる。右題名は謝稚柳氏の近著「敦煌芸術叙録」(一九五五年、六一頁)に紹介されたところであるが、この窟の造営年代に關し、謝氏は、晉昌郡に太守をおいたのは旧唐書(卷四〇地理志・卷四二職官志)の記事よりして天寶元年(七四二)より乾元元年(七五八)の間のこととみられ、かつ、樂庭瓌の晉昌郡太守兼墨離軍使たりし期間は、王忠嗣の吐谷渾討撃よりのち、すなわち、天寶五載より以後のことと考えられるを以て、それより天寶十四載、安史の乱勃発迄の間にこの窟が成つたものと説かれる(同右、八一―九頁)。筆者もこの見解に賛するものであり、さきの題名も従つてその当時のものと考えるのであるが、この題名はさきの天寶五載の記事とともに、唐側の史料にみえる墨離軍關係記事の末期のものとして注目されねばならず、樂庭瓌はおそらく漢人とみられる。

以上の記事を以て、墨離軍は唐側の史料の上から消え去つてゆく。けだし、この後まもなく、安史の乱勃発を契機として將來された西北辺疆の政治的變動に伴つて、墨離軍

は唐朝勢力圏の彼方へ失われ去つて了つたわけであるが、<sup>⑨</sup>ここでなおい逃しえないのは、大中五年（八五二）より北宋の皇祐年間（一〇四九—五三）のころまでおよそ二世紀にわたり沙州（敦煌）に拠つた地方政權——歸義軍節度使——と墨離軍との關係である。この地方政權の歴史に関しては、先年、藤枝晃氏によつて詳細な究明を経たところであるが、<sup>⑩</sup>初代の節度使張議潮の第十四女の夫、李明振の次子弘定に關して、その瓜州刺史墨離軍押蕃落等使たりしことが、乾寧元年（八九四）建立の「李氏再修功德記碑」に示るされている。<sup>⑪</sup>ここで問題となるのは歸義軍の勢力圏なのであり、張議潮時代のそれが五涼を主体とし、これに山南の青海盆地と、さらに西域北道の門戸たる伊州とを含むものであつたこと、藤枝氏の説かれたところである。<sup>⑫</sup>しかも、その中にあつて、五涼地方のみは議潮の繼承者、張淮深（咸通一三年・八七二—大順元年・八九〇）の末年に至るものな

お確保されていたけれど、その他縁辺の地方は果していつまでこれを保ちえたか頗る疑わしいこともやはり同氏の指摘せられたところである。<sup>⑬</sup>瓜州を遙かにへだてた墨離軍の故地が果していつまで歸義軍の手中にあつたかということ

が、すでに疑わしいのみならず、さらにいえば、実際にその手中に歸したことのありやなしやもきわめて疑問とせねばならない。しかも歸義軍そのものは、これを普通の唐の州県と目すべきでなく、河西方面における漢人勢力の代表者として唐朝の有力な援助をうけ、いわばその保護國の如き地位にあつたものとすべきであつて、<sup>⑭</sup>これよりするも、唐と墨離軍の直接關係を語るものは前記天室中の記事を以て最後とせねばならない。なお、謝氏前掲書には、安西榆林窟の第六窟が宋代のものなりとし、その外洞南壁の男像二身の第一身の題名に、

勅受墨蓋軍諸軍事知瓜州刺史檢校司空……

とある旨がしるされている。<sup>⑮</sup>榆林窟はすべて二十九窟あり、その年代は唐・五代・宋・西夏・元の各時代にわたるとされるが、<sup>⑯</sup>第六窟を宋代のものとする理由を知らない。歸義軍は五代後梁にいたつて張氏より曹氏に移るが、<sup>⑰</sup>五代末、曹元忠の題名が第十二洞裏洞に存することも指摘されている。<sup>⑱</sup>しかし乍ら、さきの場合、瓜州刺史の墨離軍使兼任のことは、たとえそれが宋代のことであつたにせよ、それが事実上の兼任とはこの方面の情勢よりして到底考え難いと

ころである。先の題名をもつ楡林第六篇は時代を若干溯るものではないかと考えられるが、今はその裏付けを欠くのを遺憾とする。張守珪にみ出される瓜州刺史の墨離軍使兼任のケースは、その形骸のみが実質のすでに失われたのも引きつづき、かくしてさきの如き記載となつて伝えられるにいたつたものではないであらうか。とするならば、帰義軍に随伴して現れる墨離軍はこれを実質的なものとして考える要はないわけであり、考察の主対象より一応除き去つて差支えないであらう。

ともあれ、唐との直接關係を考える場合、墨離軍は安史の乱より以後の時期にはこれを問題となしえない。安史の乱勃発を契機として唐勢力圏より失われ去つた墨離軍はついにこの後、唐の西北辺防の一軍名として復活することはなかつた。要するに、唐との直接關係に関する限り、墨離軍は天宝中を以てその命脈をとじたとせねばならない。しかるに、その墨離軍が十世紀の前半にいたつて——天宝中をへだてること実に二世紀にも及ばんとするころ——、突如として遼側の史料の上にその姿を現わし、しかもその内容を異にして出現するに及んで、われわれの注目をひくの

であり、これこそまさに小篇の考察の主対象として、遼の対西域關係史の上に浮び上らしめんとするところのものに他ならない。

### 三

まず、当面の問題となる遼代の關係史料は次に掲げる遼史(A—C)並びに契丹国志(D)の記事であり、これらは、寡見の限りでは、遼代關係史料のすべてであつて、これら四記事を手がかりとしつつ、遼代墨離軍の実態からその役割へと究明を進めてゆく。以下、關係記事を列挙するに、

- (A) 遼史卷三太宗紀上  
(天顯三年・九二八・春正月)丁巳。闕皮室・拽刺・墨離三軍。
- (B) 遼史卷四六百官志二  
墨離軍詳穩司
- (C) 遼史卷四太宗紀下  
(会同三年・九四〇・二月)辛亥。墨離鶴末里使回鶻阿薩蘭遣。賜对衣劳之。



(D) 契丹国志卷二二、四至鄰国地理遠近条

正北 至蒙古里国 (以下附文省略)

又次北 至于闕国 (同右)

又次北西 至龜古里国

又西北 (以下闕文)

又次北近西 至達打国。 (以下附文省略)

となる。以上の中、年代の最も早い記録たる(A)の記事より検討をはじめ。 (A)の記事はその直前に、やはり同年春正月のこととして、

己酉。閩北剌兵籍。庚戌。閩南剌兵籍。

とあり、北剌・南剌はともに遼征服下の奚人より構成せらるるところである。この場合、軍籍の校閱のみに止まるが、これに続けて皮室・拽剌・墨離三軍の校閱が記され、これらはもとより出軍に際してではなく、平時になされた校閱の一例であるが、遼における平時の校閱は定期的なものとは認め難く、また実施の次第も明瞭ならぬこと、島田正郎博士の指摘せられたところである。なお、以上の皮室・拽剌・墨離三軍の中、皮室軍は太祖の時より存した腹心部、すなわち親衛軍を指すものであり、拽剌軍は、「走卒謂之

拽剌。」(遼史卷四六百官志)と記される如く、歩兵にして騎兵の補助たりしものに他ならない。<sup>⑤</sup>

さて、以上二軍とともに校閱をへた墨離軍については、

(B)の記事に

墨離軍詳穩司

とあるのが参照せられる。詳穩の官名は、太宗の会同元年(九三八)十一月の官制改革の際に、

鷹坊監冶等局官長為詳穩。(遼史卷四太宗紀下)

とみえるのが、その最初であるが、こののち、横帳・国舅・某国・某部族等に詳穩司・都詳穩司の逐次設けられたこと、遼史百官志(卷四五・四六)に列記されるところであり、墨離軍詳穩司もさきの天顯三年の校閱の際には未だ設置をみず、その後におかれたものと考えられる。

ところで、ここに問題となるのは、墨離軍なる一軍団の遼軍編入の過程に他ならない。すでにみた如く、唐代に河西節度使管下の一軍として西北边防の一環をなしたこの墨離軍は、天宝年間の記録を最後として唐代史料より消え去るが、その所以を探るならば、当然遼の西方、とくに

西域進出の問題にふれて来ざるをえない。

遼と西域の交渉を語るものとしては、まず、太祖元年（九〇七）十二月に、「和州回鶻入貢」が伝えられ（遼史卷七〇属国表、さらに同七年（九一三）十月戊寅にも同様記事のみえる（遼史卷二太祖紀上）のが指摘せられる。和州回鶻はすなわち中国側史料の西州回鶻——ここにいう西ウイグル——に他ならないが、かくも早く、遼国草創の際にその兵威の未だ西方に及ばぬにも拘らず、逸早く西ウイグルの入貢をみたというのは、他に傍証を欠き、その信憑性疑なしとしない。一体、遼の西方進出は太祖の神冊元年（九一六）に始まる西南面諸部族への遠征を以てその発端とするのであつて、この年八月、麟州（陝西省神武県北）・勝州（陝西省榆林県東北）より転じて朔州（山西省朔県）を抜き、さらに東進して同年十一月、蔚（旧チャハル省蔚県）・新（旧チャハル省涿鹿県西南）等の諸州を攻め、その勢威は陰山を越えて代北（山西省代県）より河曲地方に及び、こえて神冊三年（九一八）正月、太祖は弟、安端に命じて雲州（大同）および西南諸部族を征せしめ、翌々五年、再び太祖の親征をみたが、さらにこえて天贊元年（九三二）五月、鷹軍を派し

て西南諸部を撃たしめたのであつた。いう所の西南諸部とは、タングート・吐谷渾・沙陀の諸部を含むものであるが、これら西南方面の経略についてはさきに田村博士のふれられた所である<sup>⑩</sup>。このように引きつづいた西南経略にも拘らず、西南諸部族の叛服依然として常ならざる結果、東面における渤海国の敵対行動と相まつて、遼は側背面よりする脅威にさらされ、その中原進出の企図は著しく阻害せられたのであつて、天贊三年（九二四）に試みられた西征は実に西南面諸部族への徹底的制圧による状勢の打開を意図したものであつた<sup>⑪</sup>。殊に、この度の西征の目的が、耶律鐸臻の伝（遼史卷七五）にみえる如く、渤海征討に先んじて後顧の憂を断たんとするにあつたことは注目すべく、それはこの西征計画の歴大さを充分推測せしめるであらう。さてこの度の西征の次第は遼史太祖紀下に左の如くみえる。

是日（天贊三年六月乙酉）。大孛征吐渾・党項・阻卜等部。詔皇太子監国・大元帥薺骨従行。（中略）八月乙酉。至烏孤山。以鶻祭天。甲午。次古回鶻城。勒石紀功。（中略）丙午。遣騎攻阻卜。（中略）甲子。詔樞副邊可汗故碑。以契丹・突厥・漢字紀其功。（中略）（是月）回鶻彌里遣使

来貢。(中略)十月丁卯。軍于霸離思山。遣兵臨流沙。拔浮図城。尽取西鄙諸部。十一月乙未朔。獲甘州回鶻都督畢離遏。因遣使諭其主烏母主可汗。

ここに記された「古回鶻城」は、田坂興道氏の比定された如く、遼史所見の回鶻単于城、ト古罕城、窩魯朶城に当り、外蒙古オルホン河流域のハラ・バルガスン城址に擬せらるべく、鬪遏可汗碑は松井氏所説の如く、オルホン河畔の突厥毗伽可汗碑文をいえるものに他なるまい。かくして、太祖の西征軍は天贊三年八—九月のころ、オルホン河流域にあり、阻ト(すなわち、中国側史料所見の韃靼——*Tatars*——)との戦闘を交えたが、恰かもこのころ、同年九月、ウイグル——回鶻の霸王——の対遼入貢をみた(遼史卷二太祖紀下)。「回鶻の霸王」は属国表(遼史卷七〇)には怕里に作り、それは百官志二、諸国条(遼史卷四六)に「怕里国王府」ともみえ、ウィットフォード博士はこれをそのまま承けて、怕里は遼の subordinate states の一なりとされたけれど、恐らくそれは甘州ウイグルに近接したウイグルの一分派ではなかつたか。この後直に甘州ウイグルに対する攻撃がなされていることよりしても、それは甘州ウイ

グル・プロパーとはみなし難いのである。

さて問題はこの後にある。すなわち、この年十月に入つて、「兵を遣して流沙を踰え、浮図城を抜かしめ、尽く西鄙諸部を取」つたとある記事をいかに解釈するかにかつているのである。西鄙の字面は遼史に他に一度みえて、聖宗紀、統和二十九年六月丁巳条(卷一五)に

詔西北路招討使駙馬都尉蕭図玉。安撫西鄙。置阻ト諸部節度使。

とみえ、この場合、西鄙は阻ト諸部の住地を汎称したものの如くであるが、さきの西征記事にみえる西鄙と同一意味には解し難く、西征記事の西鄙はこれに先立つてみえる浮図城との関連において考えられねばならない。さて、浮図城については、松井等氏が西域水道記(卷三)の記事によつて、西突厥の可汗浮図城、すなわち庭州に比定せられ、現在の烏魯木齊(Urumchi)の東北、済木薩(Chinazur)の北二十余里の護堡子破城に擬しておられる。これに基いて西征記事を素直に解するならば、西征軍はゴビ砂漠を越えて遙か天山の方面へ進んだものと解せられるのであつて、松井氏は然く解釈せられており、田村博士も見解を同じく

せられる。<sup>⑨</sup>これに対し、前田直典氏は、阻卜(韃靼)すらこの西征によつて遼の治下に入つたとみられぬのに、その上さらに甘肅・新疆へ進征したというのは怪しむべしとされ、<sup>⑩</sup>ウィットフォード博士は「遼代社会史」の中に：“Main events in Liao history”の項を設けてこの西征にふれ、オルホン河到達をのべてその後<sup>⑪</sup>にふれず、あたかもこの西征をオルホン河辺に限界付けているやにみうけられる。前田氏の右論文「十世紀時代の九族韃靼」は九族韃靼の問題を再検討すべく、従来ともすれば等閑視され勝の国際情勢を分析されたもので、この意味においても卓抜せるものをもち、さきの議論も、この後における同方面の国際情勢よりして一応尤もではあるけれど、さればとてこの西征の範囲をさきの如くに限界付けうべきであろうか。実際、こえて十一月には甘州ウイグルの都督畢離邊を捕えているのであり、当時における甘州ウイグルの勢力圏は甘州を中心とし、その北界は沙州近傍へ伸びていたものとみられるのであつて、<sup>⑫</sup>同方面へ及んだ遼の軍事がさらに東トルキスタンに對して全然影響なしとは到底考え難いところである。とくに甘州ウイグルの如き、この西征の結果、越えて天頭元年

(九二六)の太祖の渤海征討に當つては、タングート、沙陀等諸部族とともにその従軍が伝えられており(遼史卷二太祖紀下)、さらに、甘州ウイグルは天贊四年(九二五)四月に入貢してよりのち(遼史太祖紀下・属国表)、ほんの一時的ながらも遼への従属態勢をとつたとみられる。<sup>⑬</sup>もとより、蕭韓家奴伝(遼史卷一〇三)に、

及太祖西征至於流沙。阻卜望風悉降。西域諸国皆願入貢。というのは、阻卜についても西域についても、ひとしくそのままには受けとれないけれど、しかもそれは、この西征が甘肅・新疆へ及ぶものであつたと解することを妨げるものではない。

以上の如く解釈することによつてこそ、こののち四年、天頭三年における墨離軍の、遼軍中における存在理由も明かならしめうるのであり、太祖西征の結果として、墨離は遼に帰服し、ここに墨離軍の編成をみたものと考えられる。事実、この時の西征を別にして、天頭三年における墨離軍の問題はついに解明さるべくもないのである。かくして再現した墨離軍は、しかし、唐代の墨離軍が西北辺防の一環たりしとは全く性格を異にし、今度は沙陀と全く関係なき

は固よりながら、それはさらに、遼と西域のルートの上には大きく浮び上つてくるのである。その地理的關係よりして、墨離部族は、遼の西域進出の一拠点たらしめられたとみるべきであり、それは(C)の記事に片鱗をみせる遼の対西域交渉の上に映し出されてくるのである。

## 四

(C) の記事を再録するならば、遼史太宗紀下に会同三年(九四〇)二月辛亥にかけて

墨離鶻末里使回鶻阿薩蘭遣。賜对衣劳之。

とみえる。「回鶻阿薩蘭」は遼史にまた「阿薩蘭回鶻」として習見するところであるが、それは五代・北宋の中国側史料所見の西州回鶻——ここにいう西ウイグル——に他ならず、阿薩蘭はすなわち *arslan* (Tjewe-Radloff; Versuch eines Wörterbuches der Türkidiale. Bd I. S. 327.) を写したものに他ならない。墨離の鶻末里 (*kumê-li*) なる人物が墨離部内にあつていかなる位置を占めたかは判らなければ、おそらく部族の枢要人物と考えられ、会同三年二月を距ること遠からぬ以前に使節として西ウイグルに派

遣されたものとみられる。ところで、西ウイグルの対遼入貢はさきにあげた太祖元年(九〇七)・同七年(九一三)の再度の入貢記事を除いては、太祖の西征にも拘らず、天顯八年(九三三)六月に至るまで(遼史太宗紀上・属国表)、全くみうけられないが、それは恐らく、西ウイグルの対遼入貢路上に位する阻卜(韃靼)の対遼關係如何に左右されること多大とみるべきではあるまいか。ここで当然、西ウイグルの入貢路が問題となるのであるが、さきに藤枝晃氏は、北宋の王延徳の高昌行紀並びに太平興国八年(九八三)における西ウイグルの対宋入貢記事(統資治通鑑長編卷二四)によりつつ、それが現在の寧夏横断ルート、すなわち当時の九族韃靼の住地をへるもので、ここまでは宋へのルートと同じく、その後はさらに宋の北辺をかすめて東進したものと説かれている<sup>⑨</sup>。おそらく、ここに問題とする遼初・五代期にあつても、このルートには殆んど変りなく、やはり阻卜の中を通過せざるをえなかつたであろう。なお、安部教授は、遼の太祖西征の結果、のちのカラコルム地方——当時の「古回鶻城」もしくは「ト古罕城」——を奪取せしことより推して、西ウイグルの入貢ルートは、元初、

「長春真人などの通つた、途中は必ずしもはつきりせぬが、ともかくカラコルム辺りを中継ぎ地とする、北廻りの道」によるのが、「いちばん経済的」であるとともに、「おそらくいちばん安全度の高いもの」であつたらうとせられてゐるが、このルートにあつても阻卜の動向とは決して無関係たりえない。実際、天贊三年（九二四）の西征の結果、阻卜のうけた打撃は少くなかつたけれど、決してこれによつて遂に屈服したのではなく、翌九二五年の入貢以後（旧五代史卷三三三莊宗紀）、九二八（天成三年（旧五代史卷三九明宗紀）、九三一（長興二年（五代史記卷六唐本紀）、さらに九三二（同三）年六月（同上）と、引きつづいて後唐にたいする遼（阻卜）の入貢が記されているのであつて、それはとりも直さず、阻卜の対遼敵對關係の醸成を物語るものに他ならず、この間にあつて、西ウイグルが阻卜をへて、その敵對者たる遼への入貢を実現しえないのはおよそ当然といわねばならない。漸く天顯七年（九三二）九月・十一月にいたつて阻卜の對遼入貢をみたが（遼史太宗紀上）、この事件はさきの後唐への入貢とわずか数ヶ月のズレをもつにすぎず、このころの阻卜が遼と後唐の間に処するきわめて

デリケートな立場をみとるべきである。さらに、翌八年（九三三）二月・六月・七月・十月にも引きつづき阻卜の入貢をみるに及んで（遼史太宗紀上・属国表）、同八年六月、ようやく西ウイグルの入貢実現をみたのであつた（同上）。しかも、西ウイグルの入貢はこの後またもや後をたつたが、それはやはり阻卜の對華入貢關係と関連ありとみるべく、九三四（応順元年二月、韃靼（阻卜）の胡祿末族の雲州界上における市易事件がしめす如き、阻卜の對華密接化はすなわち遼からの離脱を意味するものに他ならない（冊府元龜卷九九九外臣部互市）。越えて会同二年（九三九）九月、阻卜の對遼入貢をみてより（遼史太宗紀下）、その後まもなく、翌三年二月、西ウイグルへの派遣使節鶴末里の帰還をみた。その理由を考へてみるに、けだし、阻卜の入貢によつて西方へのルートが打開・保全されてこそ、遼の墨離への連繫も確保しえられたわけなのであり、遼が墨離を通して西域——西ウイグル——へ結びつかんとする政治的・経済的意志の具体的表現はかかるころにもみうけられるのである。

・ところで、鶴末里の西ウイグル派遣事件のもつ意義は如何であらうか。それはこの前後における國際情勢より判断

されねばならない。この事件についてはさきの遼史太宗紀の記事あるのみで対応記事はなく、遣使の事情についても明記される所はないが、この遣使よりのち——この遣使にも拘らず——、西ウイグルの対遼入貢は全くみうけられず、この間、逆に九五二(広順元)年二月、中国側(この場合、後周)に始めて入貢した他(旧五代史卷二二一後周太祖紀)、越えて北宋草創の際、九六二(建隆三)年四月にも入貢し(続資治通鑑長編卷三・宋会要蕃夷七之二所引玉海)、さらに九八一(太平興國六)年三月、入貢をくり返したのであつて(長編卷二二・宋会要蕃夷七之二〇歴代朝貢)、ここに王延徳ら使節団の派遣をみるに至つた<sup>⑧</sup>。そして遼に対しては、保寧三年(九七二)二月、鐸遏の西ウイグル派遣をみたのち(遼史卷八景宗紀)、翌々五年(九七三)五月、漸くその入貢をみたのであつて(遼史景宗紀・属国表)、さらに保寧十年(九七八)二月にも来貢を伝えられる(同上)。以上の間にあつて、その向背定かならぬ西ウイグルに対し、遼・中国双方から夫々懐撫の手が伸ばされ、就中、王延徳遣使の際の如き、派遣先において遼の使節による中傷事件が演ぜられて、あわや紛擾に及ばんとしたこと、王延徳の高昌行紀にみえる如

くである。かくみ来るならば、さきの鶴末里遣使の当時、すでに遼と中国側が夫々西域への接点確保に努めて相互に摩擦を生じつつあつたと考えられるのであり、鶴末里の遣使は恐らく、その少し前、九三八(天福三)年十二月に後晋を發した張匡鄴・高居誨らの于闐遣使事件と関連ありしものとみられる。けだし、この遣使たるや、この年九月、于闐の使節馬繼業の入貢に應えて、同年十月、于闐王李聖天を大宝于闐国王に任じた(旧五代史卷七七高祖紀・五代史記卷八晋本紀)によるものであつたが、それにはなお、唐の前哨地点たりし于闐との交渉を再び密にせんとする意図のありしことは疑ない<sup>⑨</sup>。そしてこの使節一行はその途次において、タンダート諸部族——揔崖天子の部落をはじめとする寧夏沙漠の諸部——を通過・招撫しつつ、甘州ウイグル・瓜州・沙州を経、沙州の西では「小月氏之遺種」と称せられる仲雲族を通過し、何れも招撫を加えて、二歳のうち于闐に至り、九四二(天福七)年冬に至つて帰還したものであつて、帰還に際し、于闐王は都督劉再昇を遣して入貢し、この後、後漢乾祐元年(九四八)には使者王知鐸の派遣をみた(五代史記卷七四子闐条)。かくして中国側の触手

が河西よりさらに西域へ及び行くのを偵知した遼側においては是非共これに対する配慮を必要としたのであり、さてこそ、西ウイグルとの連繋を至急確保し、以て中国側の進出に対抗すべく、時あたかも連絡のついた墨離を通じて、西ウイグル遣使を実現したものと解して大過ないであろう。ここで或は、時期の上では鶴末里遣使が先行したかとも考えられぬでもないが、後晋の遣使は于闐の入貢に応えたものであるのに対して、鶴末里遣使の場合はむしろ遼側よりの工作とみるべきものである点において、より多く、積極的な政治的経済的意志を反映したものとみるべく、何れにせよ、二つの遣使事件は相互に無関係とはみるべきではあるまい。

## 五

鶴末里派遣事情はおよそ右の如くであつたと考えられる。しかも、この遣使にも拘らず、この後、保寧三年（九七二）、鐸邊の遣使ののち、同五年に至つて久方振りに入貢をみるまで、西ウイグルの對遼入貢はたえてみうけられず、この間、逆に後周・北宋への入貢をみたこと、さきにふれた所

である。あたかもこの当時、阻卜の對遼關係は好調をつつけ、会同三年（九四〇）八月に三度び入貢をみた他（遼史太宗紀下・屬國表）、翌四年十一月（遼史太宗紀下）、さらに翌々五年七月・八月（遼史太宗紀下・屬國表）にも夫々入貢し、同九年七月乙卯、阻卜の酋長曷刺が本部夷離婁——夷離婁は、「統軍馬大官」（遼史卷二一六國語解）と訳される。——たらしめられているけれど（遼史太宗紀下）、この後、乾亨元年（九七九）八月に入貢をみる迄（遼史卷九景宗紀）、阻卜の來貢は全くみ出されない。それはすなわち、この三十余年の間、阻卜が遼の勢力下から離脱していたことをしめし、そのことはまた、逆に中国側へは九五〇（乾祐三年）八月（五代史記卷一〇漢本紀）・九五八（顯德五年）四月（同書卷一周本紀）・九六六（乾德四年）年六月（長編卷七）・九六九（開宝二年）（同書卷二〇）に夫々鞭撻すなわち阻卜の入貢をみたことによつても証せられよう。さきの九四六年の夷離婁の官号授与の一件にしても、離脱し去らんとする阻卜の歎心を繋ぎとめんとする工作ではなかつたかとすら考えられるのである。

かくみ来るならば、鶴末里の遣使にも拘らず、ついにそ



の後三十余年にわたつて西ウイグルの入貢をみなかつた原因の多くが、阻卜の對遼關係に歸すべきこともほぼ推察しえられるのであり、この時の遣使それ自体が元々當を失せるや否やは別として、實際の効果を収めえなかつたことは明白な事實である。實際、保寧三年(九七二)に鐔邊の遣使をみたころに至つて、阻卜の對遼關係は漸く好転せしもの如く、乾亨元年(九七九)八月、阻卜の曷魯・阿里觀らの來朝をみたが(遼史卷九景宗紀)、それより以前、對遼入貢關係復活の兆はあつたものとみて宜いであらう。

ところで、西ウイグルの對遼入貢についてはさらに墨離そのものの向背が併せ考えられねばならない。すなわちここに、(D)の契丹国志の記事がとり上げられる所以であつて、それには、すなわち

正北 至蒙古里国

又次北 至于闕国

と記したのに直に續けて、

又次北西 至鼈古里国

又西北 (以下闕文)

又次北近西 至達打国

とみえる外、さらに達打国(すなわち、韃靼、阻卜)の条に常与契丹爭戰。前後契丹屢為国人所敗。契丹主命親近為西北路兵馬都統。率蕃部兵馬十余万防討。亦制禦不下。自契丹建国已來。惟此三国為害。無奈何。蕃兵困乏。契丹常為所攻。(以下略)

とある。かつて箭内互博士は「韃靼考」においてこの記事をとり上げられて、鼈古里については、それが「何ものなるか詳ならねど、是れ或は Plano Curjini の所謂 Meacrit にして、秘史の Kerait (元史の克烈) を指ししにあらざるか。」と説かれ、これに續く「又西北」以下の脱文は或いは Meacrit ではないかと推測せられたが、鼈古里が Meacrit, Kerait でなく、墨離に相当し、<sup>⑤</sup> 且克力の前身とみるべきこと、和田博士の説かれたところである。かくして、契丹国志並びに同書の「契丹地理之図」に記すところの諸部族の方位は、鼈古里に関する限り改められねばならず、達打をその西に比定するが如き、固より修正さるべきであるが、前引記事の末尾に、達打国に加えて、恐らくは Meacrit とみられる一部族とともに鼈古里をもあげて、これら「三国」の遼に対する動向の一斑にふれてゐるのに注目したい。こ

れによれば、鶻古里は他の二部族とともに遼初以来、抵抗をつづけたものの如くであるが、これもまた修正を要するのであり、太祖西征の結果、遼勢力下に逸早く帰服した墨離は恐らく九四〇年の鶻末里遣使事件のちまもなく、その向背に変化を生じたのではなかつたかとみられるのであつて、のち、西ウイグルへ派遣された鐸過の如き、墨離とは何ら關係を認められない。さらに、遼初、遼軍の一環をなした墨離軍は当然、「属国軍」の一にあげらるべきにも拘らず、しかもそのことをみないのは（遼史卷三六兵衛志下）、すなわち墨離の向背の程を裏付けるものと考えられるのであつて、部族的勢力の微小の故に属国軍の著録に洩れたものとは考え難い。とするならば、墨離の位置が遼の側よりみて西ウイグルにもつとも近接することよりして、その向背が遼と西ウイグルを結ぶ東西交易ルートの上に及ぼす影響は決して過小視しえないものがある。もとより墨離の部族的基模の如き、これを究明すべき史料を欠き、かつまた、鶻末里遣使事件以後におけるその動向を具体的に語るデータをも欠いている。この後において、遼の対西域關係の上に当然浮び上るべき墨離に関し、そのデータを殆んど

欠いていることそれ自体が問題となるのであり、開泰年間（一〇二二—一〇二〇）における耶律化哥の西方経略記事の中に、かれが阻卜を撃破したのち、「路由白拔烈。遇阿薩蘭回鶻掠之。」（遼史卷九四同伝）とみえる中の白拔烈の如き、それが西ウイグルへの道程上にあり、かつ音の若干類似せること——白拔烈（*Pei-hai-let*）——よりして一考されるけれど、なお音の相違点も多く、これらを同一視することは困難である。かかる以上、東西交通の上に及ぼした墨離の影響についても、これを的確に究むべきよすがもない。しかし乍ら、こと遼と西ウイグルの交易ルートに関する限り、ひとり阻卜の遼にたいする向背のみを以てこれを論じ去ることはなお危険なのであり、部族としてはより小さくとも、その占める位置關係よりして、墨離が遼より離脱した場合、それは遼の対西域關係にとつて多くのマイナスをもたらすものではなかつたかと考えられる。

## 六

既にみた如く、西ウイグルの対遼入貢は天頭八年（九三三）より姑くその迹をたち、この間、鶻末里の遣使もその

効なく、保寧三年（九七二）、鐔邊の遣使ののち、漸く同五年に至つて入貢し、引きつづき同十年にも入貢をみたが、このころ一方では、九八一（太平興国六）年、北宋にも入貢した結果は王延徳の遣使をみるに至つたこと、さきにもみた如くであつた。そしてこの后、さらに九八三（太平興国八）年・翌九八四（雍熙元）年と引きつづき宋への入貢をみたのであるが（宋会要蕃夷四、高昌参、統和六年（九八八）より以後、西ウイグルの対遼入貢関係は一応安定せるものの如く、以後殆んど一方的に、翌七・八・九・一三・一四年、さらにこゝえて同二三年と入貢をつづける（遼史卷二・一三聖宗紀・属国表）。しかも、この後しばらく入貢をたつてあつて、開泰年間（一〇二一—一〇二〇）、耶律化哥の西域経略に際して抄掠をうけ（遼史卷九四同伝）、さらに太平六年（一〇二六）、蕭惠による討伐戦計画をすらみたが―但し、阻卜の叛乱により、実施をみずしておわる。―（遼史卷九三同伝）、越えて重熙一四年（一〇四五）より再び入貢（遼史卷一九興宗紀・属国表）、引きつづき同一年と入貢をつづけ（遼史卷二〇興宗紀・属国表）、この後にも咸雍四年（一〇六八）と（遼史卷二二道宗紀・属国表）、天慶二年（一一二二）ともに

（遼史卷二七天祚帝紀・属国表）夫々入貢をみたが、入貢の頻度はさきの統和六一—一四年と重熙一四—一二年との間に最も多く、西ウイグルと遼との密接関係をみとるべきであらう。安部教授は、遼・宋夫々の対ウイグル関係を比較されつつ、それらの中で、宋の側にあつては、「身近でもないウイグル人とその国家とに対して、五代の諸国から継承した一種の宗主意識のようなもの以外、これといつて特別な縁故や関心をもつていたとも見えぬにたいし、ただ、東西交通路上の要所を押えていた形のウイグル人にとつては、宋は魅力ある存在であり、この場合、その関係は「や一方的」であつたのに対して、遼、すなわちかつてのキタイ（契丹）とウイグルとは唐代以来さきわめて密接な相互関係があり、「唐代から宋代にかけて、赤の他人同志の間ではみられぬ親しみの感情が流れていたはず」とも説いておられる。<sup>5)</sup> さきの耶律化哥の抄掠事件の際、都監某が西ウイグルに關し、「此部実効順者。」といつたその言葉（遼史耶律化哥伝）や、さらには、興宗の重熙二年（一〇五三）、「隣国に侵されたるがため」西ウイグルより遼にたいして「遣使求援」せる事実（遼史卷二〇興宗紀・属国表）などに徴して

も、遼と西ウイグルの間にはキャラヴァンだけでなく、「も少し大げさな政治的な駆けひきの使者の往来」をみたと考えて差支えなく、その関係は「経済的」商業的の「一本やり」ではもとよりなかつた<sup>③</sup>と解すべきであろう。しかもこの場合、両者の商業経済関係については、小篇の冒頭にのべた如く、政治関係の検討の上に立ちつつ、さらに全面的に、西ウイグルよりの入貢品目の分析にまでわたつて考察をす

ずめることによつて、遼国自体の内部構造の究明も期しえられるのではないかと考えられる<sup>④</sup>。以上の意味においても、遼・西ウイグルの相互関係は重要な意義を帯びていてあり、その故にこそ、この間における西北辺疆の国際情勢、すなわち、阻卜、さらには墨離など諸族の動向が以上の相互関係の上にもたらした影響は充分注目されねばならぬであろう。おそらく阻卜と同様、墨離は遼にたいして向背をくり返したものと考えられるが、地理的近接の故に、それが遼と西ウイグルを結ぶルートの上におよぼした影響は少からぬものがあつたであろう。そのことはまた、約千年の長きにわたつて天山東北端の地に生き抜いたこの部族の、この時代における生き方、いわばそれのもつ歴史的な

役割を窺う手がかりを与えるものなのであり、東西交通路の近くに位置して文化の波に浴し、漸次文明化の途を辿りつつ、拾頭のチャンスをつかみえたものではあるまいか。かくいさるためには、なお、金・元時代における同方面の情勢の検討を必要とするのであるが、明代におけるその著しい活躍の前提として、前代よりのエネルギーの蓄積といつたものが当然考えらるべきであろう。

(一九五五・九・一七再稿)

① 和田博士「セ克力考」(桑原博士還暦記念東洋史論叢所収)三四六頁。

② 同右論文三四三—三五頁。

③ 田村実造博士「慶陵」I、二五六・二六六頁、補注2。「宋元時代の東西交通」(東洋文化史大系第四卷宋元時代所収)一三一頁。「遼代に於ける徙民政策と都市・州県制の成立」(滿蒙史論叢第三)八七—八頁・宮崎市定博士「東洋の近世」一二四—一五頁。島田正郎博士「遼代社会史研究」四四—六頁。

④ この問題については、桑田六郎博士「回紇衰亡考」(東洋学報一七卷一—一七—一二頁)・王日蔚氏「唐後回鶻考」(史学集刊一期)及び「契丹と回鶻関係考」(禹貢半月刊四卷八期五—一三頁)・安部健夫教授「西ウイグル国史の研究」三五六—三六五頁など参照。なお、この間にあつて、愛宕松男教授が

従来通説の観のあつた太祖皇后述律氏のウイグル出自説を否定されているのは、「契丹 *Khitai* 部族制の研究」東北大学文学部研究年報第三、二三五—六頁)、とくに注目されねばならない。

⑤ 追て発表すべき拙稿「西夏とウイグル」にふれる予定。

⑥ 岩佐氏「河西節度使の起源に就て」(東洋学報二三卷二号)のち「岩佐精一郎遺稿」に収録)

⑦ 浜口博士「府兵制度より新兵制へ(二)」(史学雑誌四一編一二号八三頁)。

⑧ 同右論文八三頁。

⑨ 岩佐氏「節度使の起源」(岩佐精一郎遺稿所収)一三三頁。

⑩ 拙稿「チュルク族の始祖伝説について」史林三四卷三号四三三頁。

⑪ 和田博士前掲論文三四四—四五頁。

⑫ 前掲「節度使の起源」一三—四頁。

⑬ 和田博士前掲論文三四六頁。

⑭ 小野川氏「蒙古中世史」(支那地理歴史大系支那周辺史上卷所収)四〇七頁。

⑮ 沙陀三部落の字面は唐代史料に散見するが、五代・北宋と時代の降るに従つて消失し去り、三部落の字面は失われて、出身はただ沙陀とのみ記すに至る(拙稿「後唐の明宗と旧習(上)」東洋史研究新一卷四号五〇—一頁及び補注四参照)。エーベルハルト氏はこの沙陀三部落を“*tribe Tengu*”と解し、その中、二は朱耶氏と素葛(婆葛)とであると説くが(Wolfram Eberhard, *Some cultural traits of the Sha-To Turks*, *Oriental Art. Vol. I. p. 51*)、氏族名たる朱耶氏と、雲・朔の間における六

州胡に設けられた都督府名と説かれる素葛(小野川秀美氏「河西曲六州胡の沿革」東亞人文学報一卷四号二—三頁)とを以て夫々部名と解することはなお検討を必要とする。

⑯ 和田博士は突厥閼特勤碑文(V. Thomsen, *Altürkische Inschriften aus der Mongolei*, Z. D. M. G. Band 78 (1924), Ss. 145, 146, 171) 所見の部族名 *Bokhi* を以て墨離に比せられたが(前

掲論文三四五頁)、これに対し、岩佐氏は年代・地理的方位・史実など突厥碑文の記事内容すべてにわたる検討の結果、これを高句麗に比定すべく論ぜられ(「古突厥碑文の *Bokhi* 及び *Par Pann* に就いて」同氏遺稿所収六二—九頁)、小野川氏はこれと説を同じくせられつつも、岩佐氏の *Bokhi* 須句麗説はやや曲解の嫌ありとされ(「突厥碑文訳註」清蒙史論叢第四、三四五—六頁、註四〇)、岑仲勉氏は高句麗の官名たる莫離支の莫離を *Bokhi* に当てている(「跋突厥文閼特勤碑」輔仁学誌六ノ一・二合期、二五三—四頁)。結局、墨離の字面は当代チュルク史料には見出されなう。

⑰ 豆盧軍も墨離軍とともに河西節度使管下の九軍の中に数えられるが(元和郡県志卷四〇)、豆盧軍の豆盧の語は、白鳥庫吉博士の指摘されたように(史学雑誌二二編一二号、「東胡民族考」第七回、一三八七頁)、北史卷六八豆盧寧伝に「北人謂歸義為豆盧。」とある。唐末、沙州に出現した歸義軍の、名称の前身を豆盧軍に求むべく説かれているのも(那波利貞博士「中晚唐時代に於ける偽濫僧に關する一根本史料の研究」龍谷大仏教史学論叢所収六三頁)、この故に他ならなう。

⑱ 那波博士は「唐天室時代の河西道边防軍に關する經濟史料」

(京都大学文学部紀要第一)において在仏敦煌文書三二七四号によられつつ、このように推測せられている(同論文一二一一二頁)。

①⑩ 藤枝氏「沙州帰義軍節度使始末(一)」東方学報京都第一二冊三分六八頁註四。

②⑩ 田坂氏「中唐に於ける西北辺疆の情勢に就いて」東方学報東京第一一冊之二、六〇一—一二頁。

②① 後晋の高居誨の子闔行紀は五代史記卷七四子闔条に取められるが、甘州周辺について記した中に、「其(甘州)南山百余里。漢小月支之故地也。有別族。号鹿角山沙陀。云。朱耶氏之遺族也。」とみえ、これは甘州より東遷の際、移動に洩れて同地に留つたものとみなされる。

②② この間における西北辺疆の変動については、小野川秀美氏「汪古部の一解釈」(東洋史研究二卷四号一六頁以下)・田坂氏前掲論文六〇一頁以下・拙稿「唐代に於ける党項の発展」(東方史論叢第一、七七頁以下)参照。

②③ 「沙州帰義軍節度使始末」(一)—(四)(東方学報京都第一二冊第三分一—三冊第二分)。

②④ E. Chavannes: Dix inscriptions chinoises de l'Asie Centrale d'après les estampages de M. Ch. E. Bonin, 1902, p. 77.

②⑤ 前掲論文(一)八七—九二頁。

②⑥ 同右(一)九二頁。

②⑦ 同右(二)六四—七四頁。

②⑧ 「敦煌芸術叙録」四四七頁。

②⑨ 同右、四四一—四九六頁。

③⑩ 藤枝氏前掲論文(一)七九—八〇頁。

③① 謝氏前掲書四六二頁。

③② 奚の北剋・南剋については、松井等氏「契丹の国軍編制及び戦術」(滿鮮地理歴史研究報告第四、二七—八頁)・島田博士「遼代に於ける奚に就いて」(北亞細亞学報第一輯、一三五頁)及び「遼代社会史研究」(二五—六頁)に夫々ふれられているが、何れも聖宗統和二年の二剋設置以前の問題にはふれておらず、この問題はなお考察を必要とするが、今は立入らない。

③③ 島田博士「遼制之研究」六二五—六頁。

③④ 田村博士「遼代に於ける徙民政策と都市・州県制の成立」(滿蒙史論叢第三)補注三七。

③⑤ 松井氏「契丹の国軍編制及び戦術」二〇・三四—六頁。

③⑥ 桑田博士前掲論文一—八—九頁。

③⑦ 田村博士「遼と西夏との関係」東亞学第九輯八—九頁。

③⑧ 田村博士同右論文九頁。

③⑨ 田坂氏「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」蒙古学報第二号二〇—一頁。

③⑩ 松井氏「契丹可敦城考」滿鮮地理歴史研究報告第一、二九五—六頁。

④① 限下は遼・金側の史料にみえるところで、中国側の史料には唐・五代・宋を通じて韃靼の字面を以て表わされる。つとにこの問題をとり上げられた白鳥庫吉博士をはじめとして(「室草考」史学雑誌三〇編一—八号)・松井等氏(前掲「契丹可敦城考附限下考」)・箭内互博士(「韃靼考」滿鮮報告第五及び蒙古史研究所収)・王国維氏(「韃靼考」觀堂集林卷一四)・王静如

氏 (論阻卜と韃靼) 歴史語言研究所集刊二ノ三) などの諸研究により、阻卜と韃靼とは同じものらしく、蒙古人系の人種を中心として指称したものらしいことが説かれたが、前田直典氏「十世紀時代の九族韃靼」(東洋学報三二卷一號) はこの問題を解明すべき手がかりとして九族韃靼をとり上げ、阻卜即韃靼説を固められた。氏によれば、阻卜は契丹語にして、朮不姑がその同音異字訳と説かれるが (右論文注二)、恐らくこの所説を詳論したとみられる氏の論文「阻卜と韃靼と「Tatar」が氏の逝去によつてその發表をみぬことを遺憾とする。

⑭ K. A. Wittvogel; History of Chinese Society, Taoo, p. 110.

⑮ 松井氏「阻卜考」二九五—六頁。

⑯ 同右論文同頁。

⑰ 前掲「宋元時代の東西交通」一三一頁。「慶陵」I、一頁。

⑱ 前掲「九族韃靼」七九頁。

⑲ *ibid.* p. 576.

⑳ この西征より十余年を遡るが、九一一年 (遼太祖五年、後梁乾化元年) には、それ迄數年にわたつて行われた甘州ウイグルと張承奉支配下の沙州との交戦の終結が伝えられている (藤枝晃氏「沙州帰義軍節度使始末」(二) 東方学報京都第十二冊第四分五七—九頁)。当時における両者の境界は明かでないけれど、甘州ウイグルの勢力圏は甘州よりかなり北へ伸びており、さきのウイグル都督も恐らく甘州より北、むしろ沙州に近接した地域にあつて遼軍に捕えられたものとみて宜いであろう。

㉑ 但し、この従属状態はまもなく解消し去つたのであつて、さきの天贊四年の入貢よりのち、天顯十一年 (九三六) 四月、再

び使者派遣をみる迄 (遼史卷三太宗紀上)、全く入貢記事を出さず、逆に五代諸朝にたいし、従來の入貢関係を復活したのであつて、九二六 (同光四) 年 (旧五代史卷三四莊宗紀) ・九二八 (天成三) 年 (旧五代史卷三九明宗紀) ・九二九 (天成四) 年正月 (旧五代史卷四〇明宗紀) ・九三〇 (長興元) 年五月・一二月 (旧五代史卷四一明宗紀) ・九三一 (長興二) 年一二月 (五代史記卷六唐本紀) ・九三二 (長興三) 年正月 (同上) ・九三三 (長興四) 年七月 (同上) ・九三四 (応順元) 年正月 (五代史記卷七唐本紀) ・九三五 (清泰二) 年七月 (同上) と引きつづき入貢をつづけ、天顯十一年 (九三六) の対遼入貢のちも翌々九三八 (天福三) 年三月より再び後晋への入貢を開始した (旧五代史卷七七高祖紀・五代史記卷八晋本紀)。結局、甘州ウイグルの対遼入貢は一時的のものであつたといわざるをえない。

㉒ 桑田博士前掲論文一—九頁・田村博士「慶陵」I、二四頁。

㉓ 藤枝氏「高昌回鶻と龜茲回鶻」(東洋史研究七卷二・三合併号一五頁)。

㉔ 安部教授「西ウイグル国史の研究」三六三—三六五頁。

㉕ 岡崎博士「トルキスタン史 (近古)」(支那周辺史下巻所収一七九頁) ・拙稿「高昌行記にみえる打当の語について」(ヒストリア一号四四頁) 参照。

㉖ 石浜純太郎教授「トルキスタン史 (中古)」(支那周辺史下巻所収一六六頁) 参照。

㉗ なお、田村博士は夷離婁を以て周書・隋書・北史などに突厥の官名としてみえる侯斤・頡斤—突厥碑文所見の *Högin* に比

定せられている（遼代に於ける徙民政策と都市・州県制の成立）満蒙史論叢第三所収、注三）。

⑤⑨ 前掲「韃靼考」（蒙古史研究所収）五三八頁。

⑤⑦ 前掲「七克力考」三四三—三四四頁。

⑤⑧ 前掲書三五六—三七頁。

⑤⑩ 同右、三六三—三四頁。

⑥① 契丹國志（卷二二、諸小國貢進物件条）に西ウイグルならばに河西諸族の入貢をのべた中に、その入貢品目を列挙して、

玉 珠 犀 乳香 琥珀 碯砂 瑪瑙器 鍔鉄兵器 斜合黒皮 褐黒絲 門得絲 怕里呵 褐里絲

とみえる。これら諸品目の内容を分析して、そのいずれが西ウ

イグルよりのものなるかを究め、さらにそれが必需品——生活上の、もしくは國家的または軍事的の——か或いは奢侈品なるかを類別することによつて、その商品的意義をみ出すべきであり、それは遼國の内部構造、内部生活史への究明の一方法ともなるであらう。ウイグルの貢獻品目に関し、唐末以後、対中國關係のものは王日蔚氏が冊府元龜の記事よりその統計表を作成されているが（前掲「唐後回鶻考」五九—六一頁）、遼への入貢品の問題にはふれず、またさきの試みも統計表の作成におわ

つて品目の内容分析におよばず、これはこの後に課せられた課題とせねばならないが、これについては別の機会に期しておきたい。

### 史学研究会 二月例会

日 時 二月二日（土）午後一時

場 所 楽友会館

二圃農法の歴史地理的意義

題 未 定

不受不施派について

水津 一朗氏

豊 田 堯氏（交渉中）

奈良本辰也氏



Taiheiki (太平記) and the Military Feudal Lords;  
on the military strength in Kinai (畿内)  
at the Nanbokucho (南北朝) period

by

Yoshinobu Inoue

Many have remained to be solved, mainly because of the lack of sources, in the historical research for the Nanbokucho (南北朝) period, although a fast and significant progress was recently done in terms of social structures. The author tries a new method of approach since he has found in the course of a comprehensive study of Taiheiki (太平記) that in fact the book is available as a historical source for the movements of the military lords at that period. It is pointed out that movements in Kinai (畿内) are different from those in distant places, the strength of military lords in Kinai and its periphery can be rather clearly traced, difference is recognizable even between the military strength of Kinai and that of the periphery, and that these piecemeal studies finally come back to a further clarification of the very character of Taiheiki. The author cannot fail to compare these assumptions or conclusions with the heretofore interpretations from other sources on the same subject.

*Mo-li-chün* (墨離軍) and the Policy of *Liao* (遼)  
toward *hsi-yü* (西域)

by

Seiro Okazaki

The theory of Dr. Kiyoshi Wada (和田清) on *Mo-li* (墨離) is that the tribe forming the *Mo-li* division under *Ho-hsi Tsieh-tu-shih* (河西節度使) at the *T'ang* (唐) Dynasty is the ancestor of *Mieh-k'o-li* (乜克力), branch of *Pei-lu* (北虜), active in the middle *Ming* (明) Dynasty. The origin of this tribe can be traced back to the early *T'ang* Dynasty, and that the same tribe occupies the

northeastern part of the *T'ien-shan* (天山) ranges because of their tough character and the favorable geographical conditions of the region.

Now the description of *Mo-li* disappears in the historical sources in China after the *T'ien-pao* (天宝) era, and then it appears as a part of the *Liao* (遼) army in the history of *Liao* i. e. in the chronicle of the third year of *T'ien-hsien* (天顯) (928 A. D.). The latter fact must be connected with the westward expedition of *T'ai-tsung* (太宗) in the third year of *T'ien-tsan* (天贊), 924. Then, according to the source on the side of *Liao* "*Ku-mê-li* (鶻末里) of *Mo-li*" and his party are sent to western *Kui-ku* (ウイグル) as a mission in the third year of *Hui-t'ung* (会同), 940.

This mission must mean a part of *Liao*'s policy toward *Hsi-yü* (西域) against that of China because the pro-*Yu-tien* (于闐) of *Hou-chi* (後晉) is going on and its missions to *Yu-tien* are, on the way, trying to build up friendly relations in several regions of *Ho-hsi* (河西) around this time. Moreover, the description of *Mo-li* ceases here in to appear in the historical sources of *Liao*.